

立図書館で発見した *Essai* の手稿を、その表現、誤字などにいっさい手を入れずに左頁にのせ、右頁には、1755年に出版された *Essai* を、ちょうど両者の文章が対照する形で翻刻し、一書に仕上げたものである。この本文のあと、編者による解説をまじえた「書誌的研究」の一論があり、そして末尾に付録として、この研究に貴重な資料となる Barrois 社から売出された書物の目録がリプリントされている。さらに注目すべきことは、左右にのせられた二種の原文に対し克明な脚注がつけられていることである。この脚注で、Mirabeau が *Essai* の手稿から筆写して *Mémoire sur la population* という題目で残している手稿と、1755年版以外の *Essai* の諸版——1756年の F. Gyles の再版、1756年の Mauvillon 版、1769年の Mauvillon 版、1931年の Higgs 版、1952年の I. N. E. D. (フランス国立人口研究所) 版——とを参照にして、上記2種の原文と厳密に比較考証を行ない、一字一句の違いも見逃していない。

上の叙述からわかるように、本書はたんに容易に入手できなくなった経済学の古典を翻刻したものではない。それだったら I. N. E. D. 版もあるし、Higgs の版は1959年と1964年にリプリントされている。編者の意図は当然に別の所になければならない。それは巻末に収められた仏文の「書誌的研究」に述べられている次の言葉から推察することができよう。「Jevons 次いで Higgs による経済学者 Cantillon の再発見以来、彼の生涯、経済思想は少しずつヴェールをはがされ、明確にされてきたが、*Essai* をめぐる謎はなお解明の域からほど遠い。そこで本研究は、Cantillon の生涯や彼の思想の価値についての論議ではなく、彼の著作にかかわる若干の書誌的資料の提出を企図している」。

かねてより津田教授は、18世紀フランスの古典経済学に関心をもち、とくにその書誌的研究で次々と労作を『経済研究』に発表されてきた。今回の業績も教授の一連の同じ研究線上に属するもので、Quesnay の *Tableau économique* の成立直前のフランス経済思想史のいまだ十分明らかでない部分を、書誌的に解明しようという意図と深くかかわっていることに留意すべきであろう。

さてそれでは「*Essai* をめぐる謎」とは何か。その謎は、新たなルアン手稿の発見と津田教授の長年の地道な研究成果に照らして、どこまで解明されたであろうか。巻末の「書誌的研究」にしたがってこの間に答え、併せて本書の意義を明らかにしたい。

教授によれば、その謎は3つに整理される。第1は *Essai* の出版をめぐる謎で、誰によって、どこの国のな

津田内匠編, R・カンティロン

『商業本質論』

Richard Cantillon, *Essay de la Nature du Commerce en Général*, Texte manuscrit de la Bibliothèque municipale de Rouen, Avec le texte de l'édition originale de 1755 et une étude bibliographique, par Takumi Tsuda, Economic Research Series, No. 18, The Institute of Economic Research, Hitotsubashi University, Kinokuniya Book-Store, Tokyo, Japan, 1979, ix+453pp.

本書は上記の表題が示すように、津田教授がルアン市

んという書店から、それは出版されたのかということである。第2は、*Essai*の初めの手稿は英仏いずれの言葉で書かれたか、その諸種の手稿をめぐる謎である。第3は、Cantillonが本文でしばしば言及する *Supplément*の行方についての謎である。ただ、これら3つの謎のうち、教授の解明の努力は主として、手稿と出版の問題に向けられているので、この2つに以下の論述を限りたい。

まず手稿から。Mirabeauの著作がCantillonの*Essai*から多くのものを得ているということは、Higgsを初め、近年ではA. Fage, L. Salleron等の指摘するところだが、津田教授はこれらの著者たちよりはるかに深めた形で、Archives nationalesにある「ミラボー文書」中に見出せる *Mémoire (-Essai, -Traité) sur la population*, (M. 780)とCantillonの*Essai*そして *L'Ami des hommes*という3つの著作の内容構成を一表にまとめられ、綿密な比較考証を行ない、これらの関係を一目瞭然にされている。これ自身の評価は別として、教授のこのような丹念で注意ぶかい内容の検討は当然に望ましい効果を生むはずで、そのひとつは、M. 780の作成の時期をHiggsが1750年頃としたことの誤りを指摘する。というのは、M. 780でMirabeauが引用しているFréron等の文書の目付から、それは1756年初めより早い時期とは考えられないからである。

*Essai*の手稿は、初め英仏いずれの言葉で書かれたのであろうか。これについてはMirabeauがM. 780で述べたこと、すなわち原文は英語で、これをCantillonは親しい友人のために自身で仏訳したのだという主張が今日多くの研究者に支持されている。またHiggsはPostlethwaytの1749年の著作に、このとき仏文の手稿はMirabeauの手許にあったにも拘らず、*Essai*から多くの引用のあることから英文の手稿の存在を示唆したが、津田教授もこれに異論はない。さてそうすると、*Essai*の出版前に、英仏ふたつの手稿が出回っていたことになる。これらの手稿を探し求めて津田教授は、仏文の手稿をルアン市立図書館に見出すという大へんな収穫をあげたのである。残念なことに、この手稿も、問題の *Supplément* を含まない。

この手稿を綿密に分析した結果、教授は次の諸点を明らかにする。まずこの手稿はオリジナルでなく、誰かの口述の下に書かれたものである。しかし誰によっていつ作成されたかは明白でない。次にルアン手稿のフランス語表現の不器用さは、訳者は出版を考えなかったで語法に注意しなかったというMirabeauの言葉を裏書きするようである。さらに、この手稿をMirabeauによる

*Essai*のコピー(M. 780)とくらべると、同一の誤った言葉を繰返したり、節の変え方が似通っていて、あるいはMirabeauの所有していたオリジナルではないかと推測させる、しかし、ルアンの手稿でCantillonとNewtonの関係を示す文字が異常な仕方です訂正されているところから、上の推測は当たらないことを説く。

次に*Essai*は誰によって、どこから、出版されたのであろうか。Foxwellの所蔵した*Essai*のもつ目録から推論してHiggsは、出版社はBarroisでないかと示唆した。幸い高橋誠一郎教授の手許に問題の目録つきの*Essai*を発見した津田教授は、この目録を本書に再録、そしてここに掲載された全140冊のうち105冊に出版社を探し出し、うち39冊がBarroisのものであることを確認する。しかし周到な検討の結果教授は、Barroisは真実の出版社でないこと、むしろBarroisと提携関係をもった他の出版社がだした*Essai*を売った書店と考えるべきだと判定する。

*Essai*の真の出版社を求めて教授は、ここでふたつの目録(Godar未亡人刊とLe Blancの訳書につけられたもの)を調べ、Gournayとこれら目録の出版物の著者や思想との親密な関係を明らかにし、ここから*Essai*の出版にGournayが何らかの関係をもったのではないかと推論する。さらに問題のF. Gylesの出版物とGournayとの関係である。すなわちF. Gylesから1755年にCantillonの*Essai*とTurgotによるTuckerの著作の訳が、1756年には*Essai*の再版とCoyerの『商人貴族論』が出された。TurgotとCoyerはGournayと思想的に結ばれており、*Essai*は同じ出版社からだされ、そのうえGournayが周囲の人に*Essai*を読むよう熱心にすすめている事実から、*Essai*とGournayとの間になんらかの関係が推測されるというわけである。

終りに教授は、この時代に現われた多くの社会科学書の扉につけられた装飾模様注目し、これによって文献を類別し、Gournayと*Essai*との関係を示唆される。すなわち装飾模様のつながりから、*Essai*のF. Gyles, Godar未亡人, Gournayの訳書をだしたGuérin et Delatour,そしてCoyerの著作の出版社Duchesneとの間にある関係を見出す。さらに卓抜な着想は、これらの出版社が同じ印刷所をもたなかったか、という推論である。というのは装飾模様で整理された文献は、出版社が違ったり不明であっても、同じ印刷所をもつことを教授はつきとめたからである。このようにさまざまな観点からの書誌的研究を通じて津田教授は、*Essai*の真実の出版社も出版人もなお明白にできなかったとはいえ、

Cantillon と Gournay 間の関係のますます濃厚になったことを示唆する。

以上本書全体の構造、その特徴、研究論文の内容などの紹介を通じて、津田教授の果たされた業績を明らかにすることに努めた。本書の学界への貢献がどこにあるかは、その目的に照らして、また主要な点は指摘しておいたので、すでに読者に明らかと思う。ここでは筆者の印象の若干を記そう。

まず初めに、苦労のみ多く華やかさの少ないこのような仕事に対する津田教授の地道な努力と情熱に敬意を表したい。とくにこのような作業はフランス人であってこそ通常可能で、言語も違い遠隔の地に住む日本人には、労苦倍増することを考えるとそうである。しかしこの地

味な努力がルアン手稿の発見という成果をあげるにいたり、そしてこの手稿から多くの書誌学上の不明な点の解明に貴重な判断材料を提供することができた。今後も必ず役立つことであろう。次に本書を特徴づける周到綿密な考証に注目したい。各版対照の苦心に現れているような津田教授の一語もゆるがせにしない周密な注意深さは、とくに書誌学的研究に重要な要件であろうが、大きな収穫を収めた理由でもあろう。その一つの現れが、書物の扉の装飾模様の研究という卓抜な着想ともなって現れたと思う。

終りに I. N. E. D. の雑誌 *Population* (1980年, 1, 2月号, 210~212頁) に L. Salleron の紹介があり津田教授の業績を絶賛していることを記しておく。〔岡田 実〕

季刊理論経済学 第31巻 第3号

(発売中)

《論文》

Hiroki Tsurumi and Yoshi Tsurumi: A Bayesian Test of the Product Life Cycle of the Japanese Automobile Industry

Takashi Toyoda: Decomposability of Inequality Measures

Kiyoshi Kuga: Gini Index and the Generalized Entropy Class

—Further Results and a Vindication—

Nobuhiro Okuno: Social Discount Rate and Individual Income

李 勝彦: 台湾経済の分析: 1953-73年

奥村隆平: 為替レート予想と金融政策

—2国・適応的予想の場合—

《覚書・評論・討論》

Kazuhisa Kudoh: A Note on Economic Growth and Capital Mobility

—A Small Country Case—

B5判・96頁・定価1000円 理論・計量経済学会発行/東洋経済新報社発売